

## 東北六魂祭 2012 盛岡

遠藤秀（株式会社電通プロモーション事業局）

東日本大震災から4カ月後の2011年7月、仙台において「鎮魂と復興」をテーマに第1回目の東北六魂祭が開催された。

祭り当日は来場予測10万人を大幅に超える36万人が来場。その結果、仙台市内は大混雑し、パレードの一部が中止になるなど、運営・警備面に不安を残す結果となった。また、経済効果は約100億円と発表された。

仙台の開催から数カ月後、第2回開催の機運が、6市・6祭りで構成される実行委員会を中心に持ちあがった。

協議を重ねた結果、まずは被災地での開催を優先とし、盛岡市での開催が決定した。

電通は2012年初頭より制作参画、仙台での反省を踏まえ、「安全・安心な運営」を第一優先課題とし準備がはじまった。

実行委員会および岩手県警等の地元サイドより約20万人を収容できる会場計画とそれに耐えうる警備計画を、との厳命を受け、日夜格闘がはじまった。結果、パレード・イベント会場周辺のみならず、JR盛岡駅など市街地全域を交通規制エリアとする盛岡市はじまって以来の大規模規制を行う事となった。

また運営・警備に関わるスタッフも大幅に増員。今年は、地元から最大限の協力を得て、市・商工会議所約650名、民間運営・警備スタッフ約750名、県警約800名、消防約150名、合計2350名の体制を敷き運営にあたった。

東北六魂祭のメインイベントである「6大祭りパレード」では、約10万人の収容を念頭に、1kmを超えるパレードコースを設定。

パレード内容も無駄な演出を省き、6大祭りの演技をどこから見ても均等に楽しめるよう配慮した。

次なる優先課題は、2回目以降の開催、つまりは一巡開催を念頭に置いた施策の構築である。

昨年の仙台は、日本人として被災地の役に立ちたい気持ちをエネルギーにして、ある意味勢いでつくり上げたイベントであった。

それ故に、巡回開催できるフォーマットで、という配慮は当然なく、また迷う時間も与えられずに完成したものとなった。

今回、この巡回構築にあたり意識したことは「地元による自走化」である。

恐らく、年を重ねるごとに「日本全体の復興に対する熱」は下がる傾向にあると予想、逆に「地元発信の復興に対する熱」が盛り上がるべきと考え、地元盛岡・岩手に極力スポットが当たる場・活躍できる場を提供出来るよう心掛けた。

イベントでは昨年はアーティストによる復興支援ライブがメインコンテンツであったが、今年は沿岸部を中心とした伝統芸能の方々が元気な演舞を披露し、沿岸部の特産品・飲食を提供する物販などで、それらの思いを具現化した。

また、復興熱の低減はそのまま予算にも比例する為、今年は「オリジナルグッズ開発・販売」を手掛け、新たな収益源の模索をすると共に、このグッズ販売をイベント会場のみで留めず、地元流通（例：イオン・薬王堂・駅ビルフェザン等）などの協力を得て販売網の拡大をはかった。これは販売貢献のみならず、事前からの地元盛り上げにも寄与した好例ともなった。

このような取り組みを経て迎えた東北六魂祭であるが、晴天の下、当初の来場予測 20 万人を超える 24 万人以上の来場者でにぎわった。

盛岡市の方々曰く、市はじまって以来の人混みであったとの声も多数あり、事故もなく無事に終了することが出来た。

「復興はつづく。魂も、つづく」これは盛岡でのテーマである。

早くも来年開催の秋波が送られてはいるが、これは携わったものの使命として色々な意味での体力が続く限り、継続開催を目指していきたいと思う。

さいごに、福島市が地元のイベント（山車フェスタ）に青森ねぶたや秋田の竿燈を招聘し、東北六魂祭を契機とした新しい交流が生まれ、青森市が市長自ら県の伝統を集めた「ミニ六魂祭」の開催を目指し、自分たちの手で新しいイベントを立ち上げようとする意気込みなど、東北に活気を呼び戻そうとする地元発の動きが芽生えた事、これがなによりも嬉しいニュースであった。